

作家の原稿・書簡から活字・書籍へ

鶴見大学図書館は過去に2度、近代作家の生原稿に関する展示をおこなった（第98回「筆触が語る日本近代文学（女性篇）」平成15年7月、第104回「筆触が語る日本近代文学（男性篇）」平成17年1月）。今回は、鶴見大学図書館が多数所蔵する近代作家の原稿、書簡の中から精選し、それらが活字となり書籍となった過程を併せて展示することとなった。

私たちは普段活字によって作品や書簡を読んでいるが、創作の現場において、それらが筆やペンという身体的行為によってなされていることを忘れがちである。作家の創造行為は、生原稿の「筆触」によって具体的な様相を知ることができる。しかし一方で、それらが新聞・雑誌等に活字化され、書籍になるという過程において、生な身体性が消されながらも、新しい生命がレイアウト、挿絵、装幀等によって吹き込まれることも確かなことである。

活字は決して無味乾燥なものではない。たとえばフォント、紙質、大きさ、厚み、重量感などによって、活字は雑誌や書籍の中で生きている。その息吹を様々な媒体を通して見比べることで、是非味わっていただきたいと思う。

本学の図書館は、原稿のみならず、初版本等のコレクションも豊富である。この貴重な財産を多くの方々に知っていただきたいと思い、企画をした。近代文学に新たな興味を抱き、理解を深めていただくための一助となれば幸いである。なお、今回の展示期間は長期に及ぶため、会期中で一部展示替えをする予定である。

文学部教授 片山 倫太郎

表紙は、1. 夏目漱石 書簡の後半部、5. 幸田露伴 自筆原稿『椀久物語』